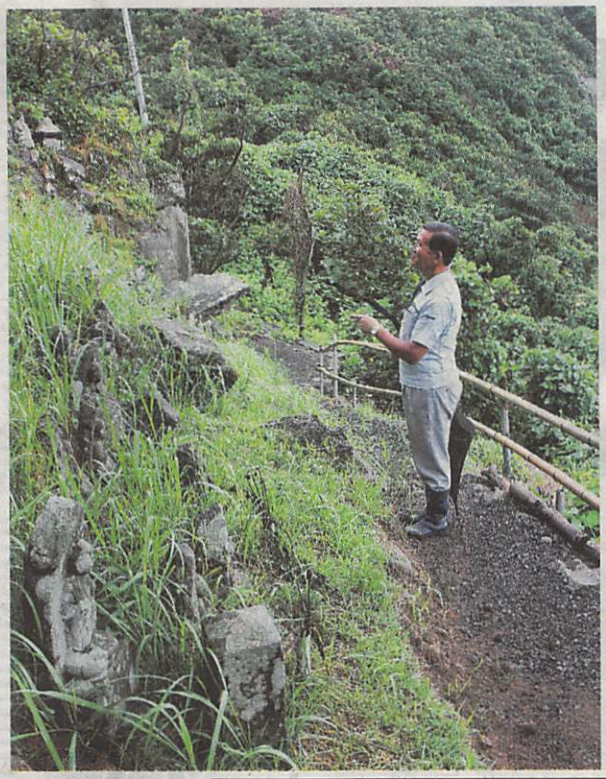
石工のまち アピール

住民有志 地蔵目玉に取り組み

真野・椿尾集落



地蔵やその周辺の歩道整備など「石工のまち」アピールへ取り組みが進む＝佐渡市椿尾

かつて石工のムラとして知られたことをアピールしようと、佐渡市真野地区の椿尾集落で、住民が主体となり、集落の象徴にもなっている地蔵や、その周辺の歩道整備などが進められている。住民らは、歴史財産を活用した地域おこしにつながればと期待している。

「集落では半数以上の世帯が石問屋など石にかかわる仕事をしていた」と、地元住民でつくる「椿尾能楽石工の会」代表の金子剛さん(63)は話す。

椿尾集落は、隣接する羽茂小泊集落と並び島内の石細工の中心地だった。特に江戸時代には、多数の職人が地蔵や墓石の制作を手掛け、全国に出荷していたという。しかし、高齢化や後継者不足、墓石とするための大きな原石が取れにくくなってきたことなどが重なり、次第に職人は減少。半世紀前には30人以上いた職人も、いまでは1人となった。

こうした現状から、同会では昨年7月、整備事業計画をスタート。その一つとして、集落に数多く残っている地蔵に着目。椿尾農村公園敷地内にあり、海の守り神として伝えられる地蔵「岩本山」の整備や、岩本山へ続く歩道の石段を修復した。歩きやすいように砂利を敷き、手すりも設置した。今後は、岩本山の周辺に100体以上点在する地蔵のライトアップや、国道沿いの案内板設置を検討している。石工の原石採取現場に続く山道の整備も計画している。

金子さんは「取り組みによって伝統文化を後世に残し、石工のまちである椿尾を広く知ってもらいたい」と語り、観光地として交流人口の増加も狙っている。集落唯一の職人である笠井寛治さん(75)は「地域おこしがきっかけとなり、椿尾の石細工が注目を浴びてくれれば」と期待を込めている。

島1周ウルトラ遠足

桐沢さん(長野)1位

元パラ五輪・保科さん銀

佐渡市で48時間以内にマラソンや徒歩で島内を1周する「エコ・ジャーニーウルトラ遠足」が18日から20日にかけて行われた。夜も歩き、走り続ける過酷なレースに、全国から参加した60人が挑戦。黙々とゴールを目指した。

42・195キロ以上を走るウルトラマラソンの愛好者団体「エコ・ジャーニークラブ」(東京)が企画。佐渡では5回目の大会で、参加者は18日、相川地区のホテルをスタート。ことしは大雨の影響で佐渡一周線の一部が崩落したことから、迂回路を通るコースとなり、例年より7・5キロ長い、計213・5キロとなった。

大会には、パラリンピック出場経験者で視覚障害がある保科清さん(63)＝長野県佐久市＝も参加

トップでゴールする桐沢明さん＝19日、佐渡市高瀬